

私は師と同じく、明治維新時までの両部神道を歩み、護法一途にいきている聖行者でございます。この世で少なくとも養女真鈴以外には、私の生きざまを理解して下さる方はいないと思っておりましたが、昨年和田氏と、丹後国籠神社の神嘗祭に於いてお会いし、その博識から伊勢の秘事に対するの推論をお聞きし、少なからず驚き、ついお話しに引き込まれたのが御縁で、今回のセミナーにお招き頂いた次第です。

「失われた古代史の復元」という、大層御立派なタイトルを頂きましたが、私は明治までの連綿たる両部神道継承者としての立場から、現代人的生き方も考え方もした事が無く、護法一途に生きてまいりました。そこで今回は、記念すべき新しき世紀の夜明けにふさわしく、明治維新時の廃仏毀釈により、時の権力者が完全に消滅したはずの、神道秘事をお話ししましょう。

我が国は神が造り玉いし国なれば、本来神佛を分かつ事自体大いなる誤りであります。生きとし生けるもの全て、生命の根源より出し事は、明々白々たる事実であります。生命の根源を印度に於いては大日如來、中国に於いては太古は盤古、その後は北斗聖人、我が国に於いては天照太神、さらに西夷に於いては、東夷に於いては神君となっておりますが、我が国に於いては神となりて、人の人たる道を最初に八衢（ヤチマタ）の例えて説かれています。爾來神なる言葉は生命の根源をさす言葉であり、あくまでも隠り身の存在である故に「カクリ

ミ」より、「カミ」なる言葉が生まれ、神の子はいかに生きるべきかを教え諭され玉うたのであります。大王家に於いても、國造家に伝わる神の道を尊崇し、日靈女（ヒルメ）に命じ、普通の神を崇めさせていたが、倭比賣命の御代になりて伊勢の杜に齊王の花を、磯部の一族海人の神人である度會家の手を借りて開かれた事が、伊勢古流とも称すべき正統古神道の誕生となり、倭比賣命が五十鈴なる神事にもとずき、伊勢における神事（カミツワザ）をその後書きとどめしが、「鈴の神事控え」となり、渡會家傳神道の中に命脈を保ち得たのであります。

縄文の半ばより、弥生にかけての古い形の神道は、一つには國造家の部族の平和と発展、今一つには部族民の健康と子孫繁栄を願い、主として部族の長（オサ）ゆかりの処女（オトメ）より選ばれて、日靈女となり神事に携わるが、祭式は神人一致となる託宣方式であり、最初に國造家の秘事を後世に伝える為に、天照太神の神事秘事にもとずく八雲琴による、神にもうしのべるといふ祝詞（ノット）方式にて、「あることふみなる國造家の秘事」を、その歳の初めと、年数回の大祭にもうしのべしが、その後さらに纏められしが『出雲國造神賀詞』となるも、侵略部族である大王家は『あることふみなる書』の前半を、当時の盤古神話にもとずき改竄したものが『古事記』であります。最初の改竄とその後改訂により神々が異なる結果となり、一大部族大王家にとって支障が生じて、新たに生まれたのが『日本書紀』であります。神事の基幹として用いられたのは、あくまでも『古事記』でした。

和を尊ぶ國造家には、相争う事を好まぬ故に、古くは一族の平和と、存続を願い入水なされし國常立命、その後には斑鳩における聖徳太子の隠された悲劇などがありますが、國造家には常に異民族に対しても優しく、他の部族に対しても争う事がない事は、『古事記』に須佐之男命の朝鮮における植林事業が明記されている事でわかりますが、國造家の血を引く一族が大倭なる地に於いても、葛木王朝を築きあげても、異民族の彼らを優しく迎えるだけでなく、異なる宗教も許したのであります。これが「兩部神道」における根本理念である、「我が国における神の教えも、異国における仏の教えも、同じ神へ通ずる真の教え」となり、ここより「二つの異なる教え」が「兩部」なる言葉になったのであります。

葛木においては國造家の血を引く役の公（エンノキミ）も、山岳法華行者の修行の場を二上山の地近くに開かせ、彼らの優れた法華の秘法を学んだ事が、叔父君願行大徳により自然宗の門を叩くことになり、さらには優れた異国の僧を紹介され、そのもとで修行したのが、雑密修行となり、さらには比叆の地に孔雀秘法を傳授されていますが、中臣神道の神祇灌頂も、中臣意美臣より受け、家傳の葛木神道を主とした神道部と、異国の優れた秘法を従とした佛家部と、「二つの優れた教え」を融合させたのが、「兩部」であり、ご存じの如く、神變大菩薩は、修驗道の曩祖とされ、資料は相当数ありますが、なぜか葛木神道に関する資料は絶無の状態であります。ただ天野僧正が、その著書『修驗道の真髓』。佼正出版社に於いて、十種神宝継承者と書かれているのが、唯一の

資料ではないでしょうか。

思えば出雲國造家の流れを汲む、賀茂役君（カモノエダチノキミ）の神祇氏族は、高天原に神祇秘壇である葛による神籬（ヒモロギ）を設えて、金剛連山を「葛なる神籬坐す山」より、「葛木」と呼ばれていたのが、場所の意味の城なるものに、その後変わり「葛城」と書かれてた聖地ですが、大王家の執拗な阻害により、葛木神道は亡びましたが、叡尊僧正により、大御輪神道を興されしおり、受け継がれる事になり、さらには慈雲尊者によって、最初は葛木神道、後は樛宮神道として、雲傳流神道に組み入れられたのであります。

連綿と一子相伝されし秘事の一端を明かすなれば、真言宗開祖弘法大師も、國造家縁の山の一族なれば、早くより一族の定めに従い山岳法華修行に励み、比叆の地にて雑密による求聞持秘法の傳授を受け、葛木は二上近くの古山寺にて法華山岳修行をし、樛宮、高天寺にて葛木神道を学び、託宣にて朝熊山において求聞持秘法を修し、兩宝童子なる護法行者を授かりし大師は、童子の夢告により伊勢路に入り、伊勢神道を学ばれたのであります。かくして大師は正式に真言密教を継承したる後、高野山を一大拠点とするに、山の一族の力を得るだけでなく、日本古来の天津神は伊勢の地、地津神は土地の地守神を招き、神々の加護を願われたのであります。「神佛と教えは異なれど、その説く所は同じなり」として、ここより「神佛なる二つの尊き教え」から、「兩部」なる名称を付し、夷国にも神の道あれば、我が国にも神の道あり。神の道は普遍なれば、そのまま「神道」なる言葉を用い、「兩部神道」の名前のもとに、神佛の

根源は本来同一として教えを説かれたとされていますが、この説にもとずき源慶安が正徳六年（一七一六）に『両文神道立派口決鈔』の中で、「神道佛道の兩部なり」と言い切っておられます。

弘法大師の神に対する敬慕の念は篤く、その御心はやがて山岳行者を束ねる真言宗理性院ゆかりの僧侶の手によって生かされたのが、『伊勢太神宮瑞柏鎮守仙宮院秘文』であり、弘法大師の名のもとに『天地麗氣記』が書かれています。今日までにその詳らかなる口傳書は公開されていませんので、いずれも内容不鮮明のままに闇の彼方に眠ったままでありますから、このまま兩部神道は潰え去るかと思いが、西大寺菩薩流の祖叡尊僧正は、命により伊勢に参拝下向のおり、伊勢渡會家において『鈴之神事秘事』の傳授を受け、伊勢渡會家の社主と共に天長十年（八三三）八月十三日大日沙門空海名の『大日尊神中臣祓天津祝詞太祝詞文傳』を骨子とした『御祓本』を書き上げたときれしものが、明治まで伊勢外宮において渡會神主が用いています。内容としては一見して明らかなる兩部形式ではありますが、さらに中臣祓、諸祓、皇天呪などとなっています。

数少ないとは言え兩部神道の秘書はありますが、今日までに一冊として完全な翻訳書はなされていません。近年においても八田幸雄尊師が三輪流神道の研究の一環として、『三輪大明神縁起』を手掛けられています。菩薩流神道の流れによる神祇灌頂、及び神事口傳の伝授を受けていられないために、鮮明な内容の解釈がなされていません。難解とされてきた兩部神事秘傳書は、実は葛

本神道の秘傳書『大和葛木宝山記』の口傳書が底本であり、これを詳らかにすれば、『三輪大明神縁起』も容易く解釈が出来ますし、さらには『天地麗氣記』も、役行者仮託による『二所大神宮麗氣記』が冒頭にあり、明らかに葛木神道秘傳書にもとずいたものであることが明々白々であります。

かように兩部神道の秘事は、すべて頑なまでに一子相傳により、神祇秘事として後世に遺していますが、その際祖師達が苦慮したのは、隠り身の神の秘事を詳らかにすれば、必ず愚かなる者が之を悪用し、世に邪悪なる宗教を興し、神の存在を軽んじるは必死と見ての処置でありました。罹る次第なれば大師直傳の神事に関する秘法は、高野山においても封じられて「唯一大師御流神道」は、水原堯榮猊下と共に高野山清浄心院より消滅し、「西大寺菩薩流神道」、「雲傳流神道」は金田元成尊師と共に京師白毫寺にて途絶え、「伊勢古流鈴之神事」、「葛木神道」は、法螺貝山人と共に阿波国剣山法螺貝滝の中に封じられたのであります。いま葛木の秘事の一端をのべますと。

聞くがよい 何を隠そうや 聖なる葛木の連山こそ

古事記聞書傳に書かれている 神話創設の地なるぞ

葛木王朝秘卷に説かれしと言う 神代の創設の地は

遠き古への時代に於いて 日本海は大いなる湖にて

未だ地の神々におかれては 住まわぬところなりし

高天原より望めば 此の地は富士火山地帯を軸とし

蝦夷地なる大地は 大きく北に向けて頭の形を描き
能登半島と 伊豆半島に通ずる 大地は第一の羽根
島根半島と 紀伊半島に通ずる 大地は第二の羽根
九州における薩摩の諸島は まさに蜻蛉の尾となり
ここより 秋津嶋なる蜻蛉の国が生まれ玉うなりと
蜻蛉の命なる要は 葛木にありなんと秘事にあり
ここより 慈雲尊者は 葛木神道を紐解き始め玉う
大倭豊秋津嶋は 天つ御虚空なる 豊秋津根なりと
葛木連山の北麓の地より 大和川に沿いて下りし人
始めて見る 大いなる河内湖なるに出会ひ驚きしと
さらに湖に注ぐ とうとうと流れ川の水量にも驚き
湖一帯の生い茂れる たくましき葦が生い茂たるを
感動深く眺め渡し 出雲なる國造家ゆかりの杣人は
さらに西側に 広々と広がりし低湿地帯を眺めるや
まさに 我が国の成り立ち ここにありと感じたり
激しく流る西側とは異なる 東側の三角州に於いて
多くは水の流れに身を任せし 浮き島の集い集いて
やがては 西と同じ湿地帯となるであろうさまこそ
まさに 国の成りたつを説くに相応しい地と思えり
大王家の天御中主命を祖とする 神話に耳を傾けず

國造家に相応しき神話を求めての旅路の果てに得た
新たな知識に感動し ここに説きおこせし玉うが
葛木神道の基幹ともなりし 天地創造の神々なりや
天地の始めはかくの如し 浮き島の如き大地なれど
新たなる生命葦の如き 強靱なる生命を与えら玉う
最初の神として迎え 國之常立之神と名づけたるは
この大地が いく久しくなりませる事を秘めたりと
この神の命を受けて 浪速江の葦原の郷においては
雄々しく たくましき 葦を芽吹かせる玉うという
大地造成の神として 國之狭土之神を出でさせ玉う
新しき大地に 葦以外の生きとし生ける者の命の糧
豊かなる作物を育み 守らせ玉えとの願いをこめて
豊斟之神を いでさせ玉うも 漂う多くの浮き島は
砂と泥土多くして 未だ一つに治まらぬさまなるを
まさに春の野に遊ぶ乙女心として 沙土煮之神とし
浮き島を一つに落ち着かせるため 一人の力でなく
二人して泥土を固め 新たなる土地を守護し玉えと
泥土煮之神なる 二柱の神をば出でさせたまうなり
新しき大地が再び水に流される事なく 必要に応じ
川面に向かい杭を打ちつけ 土留めの工事を行いて

土地を守るだけでなく、新しき作物を育てるために寝泊まりする建物を新たに拵えたまう神の御名をば、大戸之道之神と定めたるも、作物の種蒔き、育苗と収穫、保存となれば手間と、手数がかかるをもって大苦辺之神と助け合う、二柱の神をば出でさせ玉うかかる神々の働きありて、神の子らの誕生の支度はすべて整えたりとして、最後の仕上げにかからんとおおしくも、たくましく男神は、大地に降り立ちて面立ちの整ひし麗しき女よ、いざ我が腕へ来たりて貴女の全てを与え玉えにより、面足之神と名づけば何と恐れ多い言葉、宜しくば、我が胸乳を捧げんと敬ひて申せしにより、じらい惶根之神と名づけ玉うかくして、神の子らを招く為に、神代七代における最後の神として、互いにいざない、いざないよりてうつしみの神の子の生命を、与え玉う尊き方なれば伊奘諾之神、伊奘冉之神と称えたまつる次第なりかく秘事なるは口にも、書き残すべきものでなしと葛木秘卷なる秘傳書も、世にとどまる事なしと聞く

世に伝う兩部神道三大秘記書は、『寶山秘記』、朝熊山秘記、大神秘記』であります。何れもが兩部神道の初期の秘傳書であります。この中で『葛城寶山記』は、驚く事に役行者の仮託によるものとされてはいますが、その内容が葛木神事秘事に基づいており、葛木神道継承者でなければ、当然その内容は難解なものであり、ただ単に一読しただけでは意味不鮮明ですから、今日まで埃りを被った存在であります。しかし此の書を解説すれば、役行者が修験道の囊祖（ノウソ）でなく、中臣神道継承者であり、出雲國造家の十種神宝奉斎者である事が明白となります。

かつて伊勢渡會家に置いては、度會行忠の『古老故實傳』を座右の神書と扱われていますが、その中において最極秘伝の五書の一つに数え上げられている程、貴重な秘傳書であります。通称『葛城寶山記』、『金剛寶山記』、『神祇寶山記』と呼ばれていますが、葛木柱源神法では『大和葛木寶山記』でありますが、葛木神道では『兩部神道葛木寶山記』であり、これに基づいて神祇講式が作成されています。

『兩部神道葛木寶山記』

神 祇

我れ神祇の道についてかくの如く聞き玉う。

先ず天地の成立ちは無明朝夜の烏羽玉の世界に陰の氣と陽の氣生じ、やがて相克化するにいたりて互いに熱氣を生じ最初に水氣質生じたり。熱したる朦朧たる水気が上昇するに従い広大なる空間が生じ最初の天の氣質となる。やがて十方の風吹き来りてその熱氣を冷ませば水質化し汚れて濁りし氣質は下りて地の氣質となりて天地の造成を見ること古事記に詳に書かれたり。

かくの如き天地の成立ちを神聖化すれば唐国においては盤古となり、我が国に於いては天御中主之尊となる。葛木神道においては其のおりの天地のすざましい活動を十一面千手觀音に例え、頭は千手にして、足は二千もある慈悲神王を造り玉う。神王は大地定まらぬ茅渟海に一筋の葦を芽生えさせ玉い、天地の臍帯となし玉う。やがて一筋の葦が天地の間に増す如く、金色に輝く蓮華が天地の間に涌出し千葉の妙宝蓮華となり、光明赫々と辺りを照らし玉うなり。

その蓮華の中に結跏趺坐なし玉う神あり。神また無量光明を放ち、暗黒の天地の間を照らし玉いし。御名を梵天王と名づくなり。かくして梵天王は己が心の働きでもって明らかなる天の氣質と、暗き地の氣質を明確に分け玉いて、さらに天地を納め玉うに必要な八人の王子を、己が心の働きでもって生み出し玉

い、王子にそれぞれ役目を与え天地人草を納めるように命ず。梵天を天帝とも名づけ玉うが後天神となる。則ち天神之祖なり。天神の上首と治まり玉う。

天御中主之尊（アメノミナカノヌシノミコト）というは天の御中に座して天が事を司る尊き主なれば、一宗一派の祖に非ず。無宗無上にして而て独り神となりませぬ。故に天帝之神というなり。天宗廟と号すなり。天地人の三才は神のなりませぬ姿なれば、則ち三才は三身即一と同じなれど、姿無き神の姿なれば隱身の神なり。まさに森羅萬象映し出す鏡の底に秘められし故に、無相の寶鏡で表し神体となす所以にて、伊勢止由氣宮に祀り玉うなり。

極天之祖神。

高皇産靈（タカビムスビ）皇帝の御名を上帝と名づく。高皇産靈尊なる神の不可思議な力は高く茅渟の沖州に葦なるを産み出だす、尊い力故に極天之祖皇帝の座となりませり。故に大王家の祖師となり玉う所以なり。生きとし生けるものの命の糧を神聖にして育みまいらす尊き御方なる

神産巢日尊（カミムスヒノミコト）の力は、宇麻志なる優れた阿斯訶備（アシカビ）なる葦の芽を男の子の如く育てまいらす宇麻志阿斯訶備比古遲尊（ウマジアシカビノミコト）を産み、国作りの基いとなしたる後は、広大無辺なる天の氣を永久に支え玉う神天之常立尊（アメノトコタチノミコト）、同じく地

の氣も永久に支え玉う神、國之常立尊（クニノトコタチノミコト）を定め玉う。やがて豊かなる実りの爲に慈雨をもたらす雲が大地を覆う爲に豊雲野神（トヨクムヌノカミ）が現れ、宇比地（ウイジ）なる泥土を作物を育てるにふさわしい土地になす男の神宇比地邇尊（ウイジニノミコト）、実りし作物を納め玉いし蔵を守る女の神、須比地邇尊（スイジニノミコト）も産み玉えば、堅い籾種の穀を打ち破る力を秘めた男神、角杵尊（ツヌクイノミコト）、最初の愛らしき双葉を与え玉う女神、活杵尊（イクグイノミコト）をも産み玉う。作物を守るために溝を掘り大地を耕す雄々しき男神、意富斗能地尊（オオトノジノミコト）が仿けば、眉目麗しき神が疲れし男神が憩ふ、神殿を守る女神大斗乃邊尊（オオトノベノミコト）を産み、さらに人間の営みをなす最後の神として男性的機能を備えた凛々しい男神、於母陀流尊（オモダルノミコト）、たよやかで優しく女としての機能を備えた女神、阿夜訶志古泥神（アヤカシコネノミコト）をも産み出され玉うなり。

大日本州造化之神

互いに求め合ひ誘ひあう男（オ）の子なる伊弉諾尊（イザナギノミコト）、女（メ）の子、伊弉册尊（イザナミノミコト）なる二柱之神は、第六天宮なる於母陀流尊（オモダルノミコト）座（イマ）す大自在天王に座す時、天神の命

により神寶天の瓊戈（アメのヌボコ）を授かりて天之浮橋に立ち玉い、天界に伝わる秘呪文の力にて陰陽二つの氣を掻き混ぜ、したり落ちる滴にて大八州島なる国生みをし山川草木を加持し玉いし、かくの如く一見不可思議なる出来事は往昔高天原における秘事なりと聞く。さらに秘事を紐解くと瓊戈（ヌボコ）で持つて荒々しく住むに適せぬ淤能碁呂嶋（オノコロジマ）を修復し、その中央に心の御柱を立て神事を行ひ、神の子を授かり玉うなり。かくして日之神は高天原、月之神は夜の世界、風之神は海の世界を治め玉えば、春の氣、夏の氣、秋の氣、冬の氣を司る四天の神々によりて山川草木は四季折々に姿を変へ、神の子が住むに相応しき国土となり玉ふ。当に偉大なる神の力は金剛不壞なればこそ大八州島なる國を金剛山と名づけたり。

地神六合之大宗

大日靈貴尊（オホヒルメノムチ）なる御名は日之神より出でたりと。日は佛家に於いて則ち大毘盧遮那如來にて、輝ける智慧の光明、恰も日光の光と相ひ似たるさまなり。梵音にて毘盧遮那は、是れ日之別名なり。則ち除闇遍照之義なり。亦日は天子常住之日光なれば、世間における日光でもあり、佛家における法性体は有相なると似かよひしと聞く。故に大日靈貴（オオヒルメノムチ）を天照太神と名づく。八咫（やた）の大鏡に秘めて伊勢之大神之御正体と崇め

しは是れなり。則ち今に内宮に奉斎し豊葦原（トヨアシハラ）瑞穂之（ミズホノ）中津国なる主上と治まり玉う。

天津彦（アマツヒコ）火々瓊々杵（ホホニニギノ）尊は天地栄える勢い強し時の日の神の子にて稲穂饒々しく実るといふ御名にて、天孫降臨國土統治の神勅が下り玄龍之車を玉う。真床之縁（マドコノフチ）の錦衾倉（ニシキフスマクラ）は之にて、今世には小車縁の錦衾倉と称すは是れなり。此のおり三種之神祇たる八咫流大鏡。赤玉鈴。草薙之劍なるも副えられしと。天長地久なれと神事瓊戈を金剛杵に秘めて此の後杵となし、天なる陽の氣質を表せば、地なる陰の氣質を白にて表し、兩者あわせて作り出せる餅は天長地久を寿きたれば、鈴を執り劍を手にして天地無窮を祈り舞ふも同じなり。隠れ身の神なる身と云え鏡の中には明に映じたり。萬物に靈あり。草樹とても同じなり。靈有れば必ず鏡の中に眞の姿写すなり。世に云う魔神鏡は之なり。鏡と同じ偽き杵にあり。かかる故に皇孫を杵独王とも云うなり。世に伊勢國山田原に座すと云う。止由氣大にて相殿にあり。

大和国葛城上下に坐す神祇

伊弉諾伊弉册二柱之尊。葛木二上之尊。豊布都靈神は是れ法起王なり。亦熊野權現是なり。大國魂尊。國津神大將軍坐なる。

一言主神は飛行夜叉神之變ずる所なり。孔雀明王と號するは是れなり。一乘無

二法守護之故に一言主尊と名づく。故に当処を一乘之峰と名づくなり。唯だ是れ天神降りて金剛之坐は実相に坐すなり。東（ヒンガシ）の国に住心す。佛法人法は則ち一つにして無二平等之國なり。一切諸法は皆了々と覺るべし。正覺となる國、則ち安國と名づけたり。亦神の子として心優しき人住む意の大いなる倭國が大和國となり玉う。我が國は太古においては殆ど海に被われし時金剛之峰に天下り始めて國土となし玉う。東（ヒンガシ）に日出ずる大いなる國より日の本の國、さらに大いなる日の本の國より大日本國とも呼ばれたり。釋迦如來も其の昔においては皇天として金剛山の峰に三世常住の身として住し玉うと聞く。一切の物を慈しむ慈愛の神であり、神の意に従わぬ物は其の者の命脈を断つ神であり、生きとし生けるもの全てを支配し、廣大無辺な世界に住む神々をも統治なされると云う大自在天王なり。命脈を断つ神の意より布都と名づけ、その力偉大なるによりて豊の字を付し豊布都神（トヨフツノカミ）とも号す。亦の名を猛々しいなる神の性格を付して建布都神（タケフツノカミ）、その厳しい様を雷に付して建雷神（タケイカツチノカミ）と稱す。釋迦如來は文殊菩薩を従え中津國なる倭の國金剛山は高天原に降臨し玉い、神として天上界天津國に駆け登りて支配し、転じて地上界中津國をも一切を統治なし玉い、生きとし生けるもの全てを守護なし玉ふ大悲の本願力溢れたる神となり玉うと聞く。言い伝に劫の初めにおいては神聖とあり、常住慈悲神王とも名づけたり。法語にて尸棄大梵天王と云ふ。神語にては天御中主尊と名づく。大梵天宮に住

まひ玉う。神の子等を慈しみ心より、廣大慈悲なる誠の心篤き神なれば、日月をはじめとする百億とも称す無数の星、地上におわす百億からの精靈（ミワ）。天津国、中津国、地津神（クニツカミ）の一切の神々を統治し玉う故に諸天子之大宗となすなり。言い換えれば三千世界の眞の主なり。

日は則ち自性法身之應化如來にて、常住之日光なり。道德之妙にして陰陽之位となすは之に因るなり。日は則ち陽の精にて天に昇りて日となる故に、日輪の下面の水晶の如き処は、実は火球となりて燃え盛る紅蓮の炎と化して、能く暗闇を突き破り深紅に輝くなり。月は則ち陰之精にて天に昇りて月となる故に、月輪の下面の水晶の如き処は実は水球となりて身も凍える冷たき靈水が集まりて、能く暑き熱を冷まし玲瓏として輝くなり。正反対なる日月の熱は是の如き理りなり。百千からなる諸大神等の中でも日天子、月天子を以て上首とし日月宮殿なるに坐すなり。各々千もの光明が金殿を照らすを以て日宮殿光照院と名づく。宮殿は春の蒼天、夏の昊天、秋の旻天、冬の上天を遍く照らすなり。夫れ光明は何れにも片寄らぬ中道なる意を秘めたれば、一国の君といえど鋤鋤握りし民百姓と云えども分け隔てる事なく安寧なり。謂る慈悲の心常に篤き神々の中に住み玉ふと。日月でなく幾百億とも云われる星辰の中にも坐すなれば、ここに八百万の神々が生まれ出でたる所以なり。故に諸神の本地を大慈大悲の觀世音菩薩の佛智と云ふなり。星は何れも日天の氣より生まれ出ずれば、其の文字も日より生まれしと書き星と読みたりしと伝ふ。されば七つなる星は天の氣を表す北斗七星となり、星変じて天神七代となり、五つなる星は地の氣を表

す五行となり、五行変じて地神五代となる。賢劫なる長き時を溯れば初めて大地を建立して以降次第に地味は肥沃となり、神の御魂を表す餅が表れしも、姿を消し林藤の類い多く自生す。林藤も姿を消してより粳米が芽吹き、粳米が姿を消してより香しき稻穂が生じ、稻穂を徒食せし科により此の世は烏羽玉の世界と化す。其の時天之御中主之なる常住慈悲大神師尊王が日月星辰を作り、四天下なるを照らし玉ひて神の子等を生み出さんとし玉ふ。始めは独神なるも男女の形をなす双神と変わりても、独神なる父子の道なる色彩強しと伝ふ。大地も安定化し地味も申し分なく、其の機熟し高天原より最初に天孫降臨をなされし神を下代自在天子と名づく。神語には伊弉諾尊、伊弉册尊なる二柱の神なり。大八州なる島に降臨なされ玉う。常住慈悲神王の命に従いて大八州国を形成し、石海水門山野なる神々を生まれし後日天子、月天子の二神を化生なさしめ玉う。神事なるは秘すべき事多く中でも天地の考えにおいて、天地の徳より鑑みて天と地なる関係は恰も男性原理なる天の父則ち天父、女性原理たる地の母則ち天母なりと古来説き玉う。是れ則ち大慈悲なる考えより發れりものなり。本願力に住み玉うが故に神は本の世界に還り天地と共に無窮なり。神は日月と同じく公明かつ明瞭なる斎明なれば、日宮の中に住まれ広大無辺な徳で以て天下をよく覆い、神に代わりて治める国の王なるを蔭ながら守護なし玉うといふ誓願甚だ深し。故に其の徳大いなる日の如く隱身の靈なる尊き御方より大日靈尊と名づくなり。梵語で説く盧遮那の御名と心地なるも、生命の根源より出でたる靈なるも素より変わる事なく、佛性なる種子を共に秘めたるものなり。故に一

切衆生に於いて明るき素直なる日の性なるは、清浄なるを以て神の子でもあり、佛の子でもあるなり。一切の思量分別なる有心は常住慈悲の心を起こし、孝順至道の法を歩めば至るものであり、此れを偽らざる人の誠の心より信心なる文字生まれたりと。頓首恭敬して無二無心の心地に至り悟るなり。

釋迦牟尼佛が此の世に初めて菩提樹の下に生を受け玉い、無上正覺を無し玉う。初めて波羅質多羅樹のもとで結跏趺坐して菩薩となり玉う。父母孝順の道を守り、篤く三宝師僧を敬ふ方なれば、法名を孝順至道に因みたるなり。戒律を守り、心を厳しく修行に励まれた釋迦牟尼佛が法を説き玉う時、無量の光明を放たれしと聴く。是の時百億とも云われる多くの大衆だけでなく、諸菩薩。十八梵天。六欲天子。十六大國王。至心に合掌して仏の説き玉う佛の教義と戒律に聴きいったのであります。そのとき十八梵天。六欲天子。宮仕えの人。一般庶民。貧しき男女。下男下女。八部鬼神。金剛神。畜生。物の怪など全てのものが佛の教えと戒めを受け、本来清浄の心地に立ち返り一実眞如なる境地に至るなり。

太古は海底に在りしも、神々の力にて金剛不壞の山々を湧出し金剛山と名づけしと、中でも高座山なる靈峰は、大和高日葛なる神祇が寶山峰の金剛座に最初に坐せり所なり。高天原なる天宮は神々が常住住み玉う所なれば、高座山なる靈峰は神が佛に化身して成りませる所として、その後一線を引いて説き玉うなり。これは神の国に新たなる客人の神とも言える夷国の佛を迎え賓客としてもてなすためなり。天地の働きはすべて神のなせる業なれば、人も亦神のなせ

る業にて、神の御心のままに生きれば、神の御心に叶ひて心は安らかとなり、佛が教え玉う因果の道を離れ、永遠に消滅変化する事のない無為無事の大らかなる神の道を歩むことになり、人は生れ死すとも佛が説きし不浄の身となる事なく、神の子は神の子なる故に、本来清浄なる身を保つなりと。是れ神が説き玉ふ大慈大悲の教えなり。大王家より連綿と続く天皇は人にして人にあらず。神の御裔なれば天子と名づく。天子は此の理によって生前に於いても、死後に於いても佛としては崇めず、神の身として崇め奉る故に奠宗とも稱すなり。よくよく考えれば神の子である、天子の子として生を受けたる身なれば天孫であり、天孫なれば天照太神を崇め奉るも当然の事なり。天照太神は天御中主之神と同じように貴き方なれど、同じ隱身の神なれば二柱の神は靈鏡を以て表し玉ふなり。されば神の孫とされる杵独王、神名瓊々杵尊（ニニギノミコト）は天孫降臨のおり、天照大神より直接玉わりしを安樂地を選びて祀られしと伝ふなり。天子も政所に於いて鏡を奉安し、天下を治め君臣万民を度し玉うなり。第十一代垂仁天帝の皇女倭比賣命始めて託宣を玉わりし時、天地創造から始まり、日月星辰が虚空に輝くさま、陰陽一体の気なりし天地が天御柱、神語で云う天瓊戈、亦是逆戈、又は杵獨王戈、亦是常住心王戈で持って、神が是れを分離し陽の気を天となし、陰の気を地となし玉うなり。中津國に於いて天照太神が明るい天の気と、深く淀み暗い地の気がそれぞれ治まりたるを確かめ、今一度新しき天地と東の方西の方南の方北の方なる六合を眺められてより、此の広大無邊な宇宙において太陽と、月と明星なる三光の輝きを与え玉いて、神の国なる

高天原を治められしと。天照太神の威光天において輝き互れば、其の孫たる杵独王たる瓊々杵尊は中津なる国を豊葦原の中津国とし玉うなり。天照太神の命に従い高天原における火継之神事なる神事継承の儀式を行ひ、その証しに高天原なる稲穂と、八咫鏡を授かりたるが、罹る奥深き神事は凡夫のみでは伺ひ知ることの出来ぬことにて、他の宗教では無き事なり。神自信が御自ら天照太神と共に、高天原の神々を祀られし靈は、無一無二の絶対的存在のものであり、天皇家を守護なし玉うところの守護神であるなれば、此の理りは宜しく悟るべきなり。

水は大元の始まりなり。

夫れ陰の気なる水は一切の道における物事の始まりなり。萬物の父母であれば、森羅万象生きとし生ける物全てを育むという長養でもあるなり。当に天地開闢に於いて陰の気が集まりて水となり、その水が神の力にて蒸発して澄んだ気となり集まりて天となり、濁りて沈み淀みたるものが神の力にて固まりて地となり、茲に天地開闢の神事が生じたりと。高天原なる神の世界に於いて最初は天地開闢を行ひし独神が現れ玉うが、御姿は牙の形をした葦の芽なれど、その御名は定かでは無きと。やがて天の気地の気が變じて地水火風の四大となり、その氣變じて神聖なる神化生せるなり。之を名ずけて天神と稱す。亦の名を大梵天王と。或いは尸棄大梵天王と名稱し、天帝の祖にて隠り身の神なり。天瓊

玉戈、亦の名を金剛宝杵なる神の宝最初に人の手に渡りし神寶なり。地神五代の御世になって是れを天の御量柱、亦は国の御量柱と謂ふなり。大日本州中部なる要なる倭の地にては常住慈悲心王の柱と云うなり。此れ則ち正覚正智の宝座なり。故に大八州島なる国の肝心要の柱なる意にて心御柱と名ずくなり。さらに心御柱は地中深く刺さりて地の果てまで至る。地の果ての柱の下に大石あり。大石は則ち地津国との境なり。境を名ずけて金剛輪際と名づけ、ここより金輪際なる語生まれたりと。天地人民。東西南北。日月星辰。山川草木。これら全ては是れ天瓊玉戈が、其の都度必要に応じこの戈より生み出だしたるものなれば、当に不二平等の妙体なり。さらに妙体變じて法起王となれば此の意宜しく悟るべし。心御柱は是れ独鈷三昧耶形の金剛寶杵なり。所謂独一法身の智劍なり。故に大悲の徳海を表し玉うなり。徳海變じて独鈷形となる。独鈷形變じて栗色なる独鈷杵の柄となる。独鈷杵の柄に明王の姿現出し玉う。明王變じて八大龍王となる。而て心御柱を十二時守護し奉るなり。天にありて日月星辰は常住不退にして變化する事無ければ、天を表す独鈷杵は天を指し、地を表す独鈷杵は地を指し、中心部は常住不変なる不動の本尊を表す由縁なり。

罹る故に龍神が教化されて八咫の鳥となれば、八咫の鳥は諸天三宝に能く仕えるというなり。亦た鳥は天照太神の先導神であり、神の使者となるなり。

大八州中津なる国の神の座がある高天山なる所に孔雀王住み玉うなり。故に高天山の近くに孔雀王の古語一言王なる神を祀れり。その昔伊奘諾尊伊奘册尊が皇天の勅宣を受けて、天瓊玉戈を授かり高天原を表す高天山の中央部に立て

て葛木王朝なる国家の心御柱となし、茲に八尋殿を造り玉ふなり。葛木における神祇宝山なる峰は神祇峰は是れなり。二柱の神は真經津鏡を日之神の化身として始めて祀り玉へり。是れより以來天下を治めるに無相鏡を以て神像として崇め、磯城巖櫃の本に祀り玉うなり。磯城なる語は生い茂れる櫛の木多き土地の意より生じたる敷島なる語の最初なり。則ち倭なる国の古稱にて、今に檜原神社には天照太神、伊奘諾尊、伊奘册尊を祀りて神の杜の発祥とし、横向・大三輪。南北の葛城よりなる倭なる金剛の峰の一郭に日の神所化の鏡を祀りたるを以て、大いなる日の本の高き見晴らしの優れたる場所に齋き奉れる国より、大日本高見国と名づけられたり。天帝は神の教えを守り、神の道を歩む事により、恰も太陽が黒雲を払い天に輝く如く、神に代わりて一切の禍罪、不浄を払い、心にかかる痴闇をも除き、本来の清浄の心となさしめ玉いて、世に云う福田となさしめ玉う。邪まなる教え、まやかし方便を以て道を説く教えに非ずして、唯だ真実の正しい天地自然の理念を神は説き玉うなり。豊葦原（トヨアシハラ）千五百秋（チイツノアキ）瑞穂国と號するは此の神の理念を守り、天地自然の中に絶対的な神の真実の姿を見極め、心の中に神に対して真の心なる不二の柱を打ち立てしより生じたるものなり。

法起菩薩は大千世界を常住一心なるで以て説く。

吾れかくの如く聞く。大日本靈尊なる法起王が合掌して真の道をのべ玉うな

り。此の地は尊王始めて天地自然の理念を説き玉う最勝の靈驗なる地なり。一切衆生は妙法を信受して心清浄となりたる所なり。是れに因りて諸天も雲の如く此の地に集い來るなり。神の恩恵は素晴らしくあたかも雨が降り灑ぐ如しという。天津神、地津神、天地にいます諸々の神々、人にいたるまで森羅万象悉く一蒙の差別なく、神の慈愛はゆきわたり、神への帰依する心は永遠に変わる事なく、天子は神の御心に従いよく国家を治め、神の子等は天子の御心に従ふ故に、神の恩恵は限りなき故、国は富み安らかなるを以て大いに倭らかなる土地よとして大倭と名づけたるを、元明天皇の御代に安らかなる国なる意の安国を神語にて和なる国とし、偉大なる和なりし国よと申されしを漢字に当てはめ大和なる地名となりし。

亦た神祇寶山と号し、一言主の神を此の山々を守護し玉える地鎮神として崇めたるは。印度における神の末裔孔雀家と、さらに孔雀明王がよく仏法守護なし玉うに因み、此の地を神祇守護の神として孔雀明王の垂迹とし玉うなり。第四十一代高天原におわす広野姫は葛木王朝の末裔なり。王朝においては葛木の一言主の神に仕える葛木役君における役優婆塞は、よく神に仕え徳を以てその地の人々のために尽くすを以て、大法導師と稱される由縁なり。神に仕える心は揺るぐ事のない大慈悲に溢れ、人々に道を説くにその弁は一際優れ、能く衆生の煩惱の迷夢を覚まし、人々より慕われたる方にて、その後広く諸国を遍歴なされ、その清浄なる法でもって衆生の貪瞋痴の三毒を消滅し、一切の魔につながるものを降伏なし玉うなり。当に身口意の三密の威神力を象徴なし玉う

執金剛神なる威徳と同じなり。身は例え人の中に暮らすとも大神の心に叶い玉う有徳の人なり。常に心正しく神明を崇め、終日心乱す事なく、精進潔斎に努め、心惑わす貪瞋痴の三毒によって身を汚す事無く、法を以て我が身となし、優れたる智慧を以て己が命となし、信義を以て徳義となし、眞の道を以て邦家なる土地を治める。常に信心の心篤く、己が土地の者だけでなく、頼り来れる者には慈悲の手を差しのべ玉うなり。されば神に通じるその心は益々光り輝き、宗祖の威徳は津々浦々に聞こえる所となり玉う。俗の者は時々刻々に現す所の煩惱塵埃に惱まされるに超然として解脱し、身は金剛不壊なる独鈷杵に変じる神仙術に通じ、此の宝杵を以て様々に変化し玉うなれば、則ち葛木の靈山に此れを治め玉うなり。もともと葛木は秘すべき神祇の山なれば俗の者には伺い知り得ぬ神事多く独鈷杵はその一つであり、さらには神祇の山なれば多くの先住者杵人が鈴音高く打ち鳴らし神々の降臨を祝福せりと。高座山にかつて神々が降臨し玉う高座石あり。さらに三十餘の滝激しく大地を揺るがし、地底深く流れ地底津宝宮に至ると。是れを名ずけて龍宮と。又は仙宮とも云ふなり。仙宮は神語にて神宝でもある大八州なる島の形をしたる龍宮城のある場所なり。眞如の玉海中にいりて天瓊玉戈に變ずと云うも物の考え方の一つなり。全て神事に関する事は本来清浄にして穢れ無き無垢の心となり、ただ一向神の心に帰依し、不浄な心、荒々しき心、邪まな心を棄て去り、和魂（ニギタマ）宿る心となりて始めて分別の心働くなり。

夫れ天瓊玉戈の亦の名は天逆矛。亦は魔反戈（マカルガエシノホコ）。亦は

金剛寶劍と名づくが。亦は天御量柱若しくは国の御量柱とも名づく。亦は常住心柱とも名づく。亦は忌柱とも云うなり。惟れ皆全て天地開闢之凶形を表し、天御中主の神宝なる独鈷の様々な言い表し方なり。諸神諸仏諸菩薩の多くの教えの道あらんとも、その根源に於ける心識を正智で以て表せば、不変の金剛座となるなり。かかる次第にて亦の名を心蓮臺と云うなり。

歸命本覺心法身 常住妙法心蓮台

本来具足三身徳 三十七尊住心城

普門塵数諸三昧 遠離因果法然具

無邊徳海本圓滿 還我頂礼心諸佛

凡そ八百萬の神祇南閻浮提に下生し玉えば、釋迦如來も亦た与に下生し玉うと聞くなり。

我ら凡夫は父となり、母となり、君となり、臣となり、生々世々この六道輪廻の道を歩むと云うに悟る事なく、孝順の心なく、神佛を敬う心なく、様々な罪を犯し地獄に墮ちゆくと。毘盧遮那如來ここを以て大乘の心を説き玉えり。佛の教えここより起これりと。

徒に惑い煩う事なく、神事の秘すべき教えの肝要を守らんがために、右要点を筆記し書き留めておくものなり。時に己卯沙門行基勅を奉じ文を選び之を書き

記すなり。天平十一年（七三九）己卯伊勢大神宮において版木を改めて是れを印刷す。正しい神事発祥の由来を詳らかに致す事は、神にとって瑞相と信じ一
百枚も新たに印刷し、伊勢両宮に是れを献じ奉るなり。

神祇寶山記

金剛山縁起に曰く。白鳳二十年（六九二）辛卯三月の年に於いて。役行者葛木縁起を勘案なされ玉う。最初十巻を書き玉い、一言主の大明神社主に是れを預け玉うなり。一言主の社主は直ちに宝蔵に奉納され玉う。その十巻の内金剛峰神祇卷は世間に心づかぬ間に流布いたすなり。彼の十巻の縁起は一言主明神の社主是れを役行者に返す事なし。大寶元年（七〇一）辛丑六月七日役行者入唐し玉う。慶雲二年（七〇五）乙巳歳文武天皇の御世に一言主の社主に彼の縁起書の有無を御下問なされ玉うに、神を恐れ奉る事なく此の儀を不問に付すなり。その後元正天皇の御世養老五年（七二一）辛酉歳に、沙門行基が勅定を玉わり僅かに残れり金剛山神祇卷の肝要の所を抜き出し書き表せり。此の外昔神祇高天原に諸神降臨し玉う金剛山の山麓、並びに當峰の嶽々御在所に其の数は不明なれど、別には是れを書き記さずとも、かかる神事は皆人の知る所なり。年の爲是れを記すなり。

天平十七年（七四五）乙酉四月一日

興福寺仁宗 之を伝えんがため記す。

第四回生駒山頂定例セミナー

「失われた古代史の復元」

伊勢古流神事法燈護法行者
西大寺菩薩流古神道神祇師
高野山御流神道神事継承者

片山 公壽

伊勢古流正統伝承者
折り・結び・包み
日本最終神祇師

片山 公壽